

第66回私学美術展各部門講評文

絵画部門

- ・先生方の投票結果をもとに、6名の審査員で4回ほど見直しをしながら、慎重に審査を行いました。
- ・今年の絵画部門出品数は、334点。昨年は342点でしたので、数としては少し減っています。
- ・また、100号以上の大作が減り、30号から50号サイズの作品が増えているようです。
- ・全体の印象として、小さくまとまったような作品が多かったように思います。これはサイズが小さくなつたことが原因というより、作品から発するスケール感がやや弱くなった、ということです。作品のサイズは大きい方がいい、ということではありません。サイズに関係なく、限られた画面からはみ出して、見る人にどれだけ迫るか（挑むか）という姿勢を、もっと見たいなと感じました。
- ・美術大学の実技試験は、これは合格・不合格のゴールのはっきりした世界です。この私学展の作品は、それとは違い、「自由」の追求にあると思います。破たんのない、優等生的な作品を目指すのではなく、高校生にしか出せない、内側にある感性をもっと大胆に画面に出していく、と思います。
- ・絵を描くにあたっては、自分の中の感じる心を大事にしなければなりません。その一方で、描く方法や技術（テクニック）を身につけないと、なにも表せません。心と技術の二つが備わって初めて満足できる作品が生まれるわけですが、今回、特に優秀賞になった全体の約1割の作品には、強く表現したいものと、高いテクニックが、ともに兼ね備えられています。
- ・賞獲得のなかった作品にも、「何かある」と感じさせ

られ、テクニックに頼った作品よりも惹きつけられる作品も少なくありませんでした。がっかりしたかもしれません、それより、何が足りないのかもう一度考えてみてください。

・とはいっても、審査をする立場で言うのはおかしいかも知れませんが、本当は、先生たちから与えられる「賞」を過剰に意識すると、自由で大胆な作品は生まれにくい。現実には、賞は獲得したら励みになるでしょうし、これをなくすわけにはいかない事情もあるのですが、私学展は本来、優秀賞や奨励賞を目指すだけの展覧会ではないことを、一度みんなで考えてみてもいいかもしれません。作品を仕上げたときに作品と向き合って、達成感、満足感を覚えることこそが一番大事で、賞はついでにもらう物、くらいに思うのが良いのかもしれません。会場に並ぶ他の生徒の作品を観るときも、ぜひ、そういう眼で鑑賞していただければな、と思います。

・最後に気になった点は、写真プリントやコラージュ的な素材に助けを借りたような作品が散見されたことです。見た目は緻密で美しいだけに審査員の先生方では話題になり、やはり基本となるのは画面上の試行錯誤であり、安易にゴールへの近道を探すより、下書きの段階から仕上げに至るまでの長い過程をこそ大事にしてほしいという結論に至りました。

絵画部門からは以上です。

イラスト部門

完成度が高く密度の濃い作品が、本年度もたくさん出品されました。

一步、近づいて見入ってしまうような作品は、作品としての描写や造形の面白さだけではなく、広がってい

く世界観や作者の考え方などが描き出されているように感じました。

イラストの魅力は、他者と違う自分だけの世界を規定サイズの画面の中に表現することにあると考えます。上級生になるにつれ、絵具だけでなく、パステル、水彩、CG、色鉛筆など多彩で華やかな表現手法が見られ、高校生全体の表現技術は向上しているように感じられました。

しかしながら、自分しかできないオリジナリティーが表現の魅力と考えるなら、全般的に少し元気のない印象を受けます。もっと若いエネルギーをぶつけたような作品が多くなっても良いのではないか。他者を引き付ける魅力は、華やかなテクニックだけでなく、情熱やこだわりの深さも魅力になります。今しかできない、思い切った表現がみなさんの可能性を広げることもあると思います。

高校生にとっては自分の表現のスタイルを見つけるという行為は簡単なことではありません。それを一生懸命見つけようという姿勢がある作品が多く見受けられた点は素晴らしいと思います。きっと自分しかできない何かを見つけることが出来ます。1、2年生は来年のこの私学展で、3年生はまた次のステージでこの経験を生かしてください。

中学部門

作者の想いが伝わる作品が多く、意気込みが強く感じられた。表現の幅が広く、絵画だけでなく版画や立体、工芸作品にも優れたものが多くなった。また細かな作業を積み重ねて、力の尽くされた作品には好感が持てた。大人の思いつかないような発想の下で制作されている作品が何点かあり、柔軟な思考に敬意を表した

い。

風景画を中心とした写実表現においては、構図や空気感など、形の正確さも含めて描写力の優れた作品が多くあったが、技術的な完成度の高さだけでなく、中学生らしい視点で直に描かれた作品もあり、今後の成長に期待できる。

またイメージ表現においても、発想の豊かな作品、コラージュ技法を取り入れ、オリジナリティを追求した作品など、新しい表現にチャレンジする前向きな姿勢が見て取れた。

イラストとデザインの作品については、2つの違いが、まだ中学生という段階では曖昧であるかもしれない。高校と同じように規定をしっかり設け、意味や目的を理解した上で制作に取り組んでもらった方が良いと感じた。

版画作品は、色彩を巧みに活用した作品や、秀逸な技巧が目立った。

工芸作品は、伝統工芸の精巧さと美しさを見事に表現している作品が多く見られた。

展示形式（安全面・レイアウト）に配慮をする作品もあったが、総合的な印象としては、想像力豊かで若々しいパワフルな作品に溢れていたと思う。来年も楽しみである。

【テーマ部門】

この部門は与えられたテーマに沿っていなければいかなる表現方法も認められる、まるで異種格闘技戦とも言える分野である。毎回、私たちの意表を突く作品が多く出品される。見る側としてはそこが最大の魅力でもある。例にもれず今回も写真あり、映像あり、立体ありと中高生たちが頭を絞って、『どんな「日常と非日常」

を表現しようか』と悪戦苦闘した作品群が見るものの心を動かした。

例を挙げると大阪国際大和田中学校、石野さんの「硝子の花園」は中学生とは思えないクオリティで、どれほどどの時間かけて制作したのかと感心させられた。また天王寺学館高等学校の大澤さんの「存在の証明」は音と造形で見事に空間を作り上げた点が好評価につながった。惜しくも受賞を逃した作品にも各制作者の思いが様々な形で表現されていたことは称賛に値する。

唯一、気を付けて貰いたい点は、その時のテーマを表現しようとしているかである。何故、この部門に出品してきたのか不明な作品は高度な技術が認められても受賞につながらない場合がある。しかしながらテーマ部門はその自由度から合作にも取り組みやすいので、個人、共同制作を問わず中高生の皆さんのがんばるチャレンジを期待したい。

【版画・立体・工芸】

工芸部門では、ガラス・染色・木工・陶芸など様々な素材の作品があり、表現技術の優れた作品が数多くありました。中でも樟蔭高校の1年橋本京香さんの「カラフルな僕」という鳥をモチーフにしたステンドグラス作品はガラスを立体化しながら美しい色彩で生き生きと表現されました。立体部門では完成度の高い具象作品に票が集まりました。良い作品がある反面全體としてはパワーダウンした印象を受けました。自分の限界に挑戦するような大きさや、密度の高い作品、個性あふれる作品がもっと出てくることを来年は期待しています。立体部門・工芸部門の審査をする中で出品ジャンルを検討した方が良いのではと感じる作品がありました。生徒の皆さんには出品規格を熟読した上で、

顧問の先生に出品ジャンルを相談するとよいと思います。また、床を使って展示する場合、展示の仕方や作品をのせる台にも配慮して出品してください。版画部門では様々な技法の作品が数多くありとてもよかったです。特筆するとすればエッチング作品はインクのふき取り具合などで作品の表情が大きく変わるのでトライ＆エラーを繰り返して作品の完成度をより高めて出品するとよいと思います。

【デザイン】

デザインの総出品数は101点。その中にはグラフィック、プロダクト、ファッション、建築と多様な表現が見られた。それぞれに高校生ならではの視点や発想力が発揮されていたが、中でも制作者のメッセージ性がしっかりと伝わる作品が高い評価を受けた。

ファッションや建築デザインには斬新なアイデアと丁寧な作り込みをされている作品が目立ち、プロダクトデザインの中にもそのまま製品になるのではと思えるほどのクオリティを持つ作品が並び、空間全体から高校生のパワーが感じられた。

特に向陽台高等学校の西村さんの「WILD FRONTIER」は客觀性を持って自分のテーマに取り組む姿勢が伝わってきたことと、詳細なキャラクター設定や表現方法で見る側に前後のストーリーまで想像させる力強さが注目を集めた。

また、中には高い描写力を発揮しながらも伝えたい思いが不鮮明であったり、メッセージははっきりしているのに表現に惜しいところがあるなど、後一步の作品も見受けられた。次年度以降にもチャンスのある学年にはキャッチコピーやコンセプトボードにも注意を払って制作して貰いたい。皆さんの創造力に期待します。